

## 第 17 回東海小児整形外科懇話会

主題：I. 手の先天異常

II. 骨系統疾患の長期経過例(成人例)

当番幹事：二井英二(三重県立草の裏リハビリテーションセンター)

日時：平成 14 年 2 月 9 日(土)

場所：大正製薬(株)名古屋支店 8 階ホール

### A. 一般演題 座長：西山正紀

#### 1. 当院における小児自己血輸血の現状

藤田保健衛生大学整形外科

○高橋明子・中井定明・志津直行  
前原一之・竹内 啓・吉沢英造

藤田保健衛生大学形成外科

吉村陽子

藤田保健衛生大学輸血部

長谷川勝俊

近年同種血輸血の合併症回避のために自己血輸血が実施されている。全身状態が良好で、緊急を要さない待機手術の場合には自己血輸血を実施すべきである。自己血輸血の保険点数は 6 歳未満で高く算定されている。当院では 1990～2000 年までに 2113 名の自己血輸血を実施してきた。6 歳未満の小児は年齢の明らかな 1994 年以降では約 0.3% であり、形成外科で用いられていた。当院の自己血輸血の現状を若干の文献的考察を加えて報告する。

#### 2. 骨端軟骨を穿破した小児サルモネラ骨髄炎の 1 例

浜松医科大学整形外科

○鈴木隆辰・星野裕信・西山真一  
山崎 薫・長野 昭

小児における化膿性骨髄炎は骨幹端部に発生し、骨端軟骨がバリアーになるため炎症が骨端に波及することは稀である。1999 年イカ乾製品が原因と思われるサルモネラ感染症が流行したが、今回我々は、骨端軟骨を穿破した小児サルモネラ骨髄炎に対し、搔爬・抗生剤投与により鎮静化、術後 2 年半経過観察し、脚長差なく治癒した症例を経験したので若干の文献的考察を加えて報告する。

#### 3. 小児の環軸椎回旋位固定に対する治療経験

岐阜大学整形外科

○岩井智守男・宮本 敬・児玉博隆  
伊藤芳毅・細江英夫・清水克時

岐阜中央病院整形外科

西本博文・青木隆明

博愛会総合病院整形外科

大野貴俊

環軸椎回旋位固定は 10 歳以下の小児に好発する環軸関節脱臼の 1 つであり外傷のみならず素因や炎症が要因となり斜頸位で固定される疾患である。また、環軸椎の回旋偏位により斜頸を呈し、保存的療法に抵抗し長期間持続するものと定義されている。

今回我々は 3 症例の小児における環軸椎回旋位

固定に対する、それぞれ異なった治療方法を経験し良好な結果を得たので文献的考察を含めて報告する。

#### 4. ダウン症候群に合併した股関節脱臼の 2 症例

岐阜県立希望ヶ丘学園整形外科

○徳山 剛・高見秀一郎・岩佐一彦

ダウン症候群は筋緊張低下や関節の弛緩性があり、関節の脱臼を合併することが多い。今回、股関節脱臼を合併した 2 症例を経験したので報告する。

先天股脱と比べ臼蓋形成不全はなく、筋緊張低下や関節の弛緩性のため整復は比較的容易であった。しかし、その筋緊張低下や関節の弛緩性のため整復位の保持には苦労した。開排位ギプス固定 1 か月、その後外転位ギプス固定 1 か月と二段階のギプス固定により安定した整復位が得られた。

#### 5. ペルテス様変形の 3 例

愛知県青い鳥医療福祉センターリハビリテーション科

○深谷泰士・栗田和洋・岡川敏郎

症例 1: 8 歳, 男児, Trichorhinophalangeal 症候群に合併した症例。症例 2: 3 歳, 男児, 重症脳性麻痺に合併した症例。症例 3: 4 歳, 男児, 精神運動発達遅延, 低身長にてフォロー中, 2 歳時に左大腿骨頭の低形成を認め 4 歳時の MRI にてペルテス病と診断した。以降免荷, 装具療法を試みたが骨新生を認めず, 治療 1 年後より近赤外線療法を開始し骨新生を認めた症例。以上の 3 症例について文献的考察を加えて報告する。

#### 6. 低身長, 短指症, 関節拘縮などを特徴とする 2 症例

名古屋大学整形外科

○鬼頭浩史・北小路隆彦・加藤光康  
高嶺由二

症例は 10 歳女児と 8 歳男児で、ともに低身長, 短指症, 関節拘縮, 硬くてぶ厚い皮膚, 遠視などの所見を共有しており, Moore-Federman syndrome が疑われる。本疾患の本邦での報告はなく, 渉猟し得た範囲でもこれまでに 2 報があるのみである。類似疾患である acromicric dysplasia, geleophysic dysplasia などとの鑑別につき検討する。

### 主題 I. 手の先天異常

座長：平田 仁

#### 7. Poland 症候群における手の形成不全について

静岡県立こども病院整形外科

○増田和浩・滝川一晴・芳賀信彦

静岡県立こども病院形成外科

朴 修三

Poland 症候群は片側の胸筋低形成と同側上肢の形成不全を合併するものであり, 1941 年 Poland が最初の 1 例を報告した。我々は, 1974 年より 1991 年までに静岡県立こども病院を受診した男子 18 例, 女子 8 例の計 26 例の手の形成不全について調査を行ったのでここに報告する。

## 8. 趾骨移植による指再建の経験

国立東名古屋病院整形外科

○牧野仁美

名古屋大学手の外科

堀井恵美子・中村藤吾

横断性形成障害2例, 絞扼輪症候群1例に対し, 趾骨移植を行ったので報告する。手術時年齢は1歳2か月~1歳4か月, 第4趾の基節骨を, 3手で母指に, 2手で小指に移植した(計5か所)。術後経過観察は1~5年(平均32か月)。趾骨は全例吸収されることなく生着し, ピンチ動作など, 補助肢としての機能改善がみられた。足趾は第5趾とほぼ同等の長さで, 歩行障害は見られなかった。

## 9. 開放療法による合指の治療経験

名古屋市立大学整形外科

○関谷勇人・窪田泰浩・寺澤貴志

杉村育生・和田郁雄・松井宣夫

合指に対して開放療法を試みたので報告する。症例は3例5手の5指間で, 手術時年齢は1歳1か月~1歳3か月であった。合指は完全型が3指間で, そのうち2指間には末節骨の癒合を認めた。不完全型は2指間であった。手術は, 背側台形皮弁で指間底部を形成し, 局所皮弁で被覆できない指側部には植皮をしないで周囲からの上皮化を待つ開放療法を行った。若干の文献的考察を加えて報告する。

## 10. 前腕における仮骨延長の治療成績

名古屋大学手の外科

○堀井恵美子・中村藤吾・中尾悦宏

矢島弘毅・洪 淑貴・稲垣弘進

前腕の短縮に対して, 仮骨延長法を行ってきたので, 治療成績および合併症について述べる。外骨腫などの腫瘍性病変による前腕変形19名27肢, 桡側列形成障害などによる前腕の短縮例15名に対して仮骨延長を行った。腫瘍群, 短縮群, 各々, 延長量22.5, 27.4 mm, 総創外固定装着期間118, 168日で, H.I.は56.5, 54.7日/cmであった。合併症として, 感染1, 仮骨骨折9, を経験した。

## 主題II. 骨系統疾患の長期経過例(成人例)

座長: 二井英二

### 11. Apert症候群の長期経過例

上野総合市民病院整形外科

○長倉 剛・日根野隆治・今村進吾

山崎征治

21歳, 女性, 1歳1か月~21歳までの長期経過を追ったApert症候群の1例を報告する。

### 12. 濃化異骨症(Pycnodystosis)の1成人例

高山赤十字病院整形外科

○荒谷 繁・益田和明・前田雅人

高澤 真・有本利恵子・清水孝志

溝口隆司

濃化異骨症は低身長, 全身の骨硬化, 泉門の開存, 易骨折性などを特徴とする比較的稀な骨系統疾患である。症例は48歳, 男性, 身長155 cm, 体重56 kg, 合計8回の骨折歴がある。家系には同様

の症状を呈する者はない。現在, 下顎骨の骨髓炎のため口腔外科で治療中であるが, 本症例の整形外科的特徴について報告する。

### 13. 著明な骨格変形をきたした骨系統疾患の長期経過例

名古屋大学整形外科

○鬼頭浩史・北小路隆彦・加藤光康

高嶺由二

愛知県心身障害者コロニー 中央病院整形外科

沖 高司・服部 義・矢崎 進

伊藤弘紀

名古屋大学整形外科および愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科で経過観察中の骨系統疾患症例のうち, 著明な骨格変形をきたした18歳以上の4例を報告する。疾患の内訳は偽性軟骨無形成症, 骨形成不全症, 屈曲肢異形成症および進行性骨化性線維形成症で, 年齢はそれぞれ23歳, 22歳, 20歳, 18歳である。これら長期経過例の小経験から, 重症の骨系統疾患症例に対する今後の治療指針につき検討する。

### 14. 先天性脊椎骨端異形成症成人患者の社会生活

静岡県立こども病院整形外科

○滝川一晴・芳賀信彦・増田和浩

先天性脊椎骨端異形成症は体幹短縮型低身長を示す代表的な骨系統疾患であるが, その社会生活については報告がない。大学病院および小児病院整形外科の部に依頼し, 各施設で登録されている20歳以上の同疾患患者を対象に社会生活についてのアンケート調査(身体障害者手帳の取得状況, 小中学校就学状況, 中卒後の進路, 就職状況, 最近計測した身長・体重, 合併症および疼痛部位, 現在の歩行能力, 結婚・出産)を行ったので報告する。

### 15. 先天性脊椎骨端異形成症の成人例の検討

三重県立草の突リハビリテーションセンター

○西山正紀・明田浩司・二井英二

先天性脊椎骨端異形成症は, 出生後より体幹短縮型小人症を呈し, 脊椎, 四肢近位骨端部に著明な病変を持つ。今回我々は, 著明な股関節病変を伴った成人例4例を経験した。低身長の程度にかかわらず, 内反股などの股関節変形は高度であった。しかし, X線所見に比べ臨床症状は軽度であった。若干の文献的考察を加えて報告する。

### 16. 骨系統疾患に対する脚延長術の成績

愛知県心身障害者コロニー中央病院整形外科

○伊藤弘紀・服部 義・矢崎 進

沖 高司

名古屋大学整形外科

鬼頭浩史

1998年以後行った低身長に対する脚延長術24例(大腿33肢, 下腿46肢)の成績を報告する。手術時平均年齢は12.8歳, 延長率は大腿平均25.9%(13.3~49.6), 下腿平均36.8%(17.4~57.9)であった。多くの症例が成長終了しているが, 骨形成に問題なく, 現状ではおおむね

良好な成績である。しかし、長期の関節拘縮遺残、下肢アライメント異常など、成人期以後が危惧される症例もある。

17. Paraplegia をきたして椎弓切除術を施行した achondroplasia 成人例 5 症例の手術成績

金山クリニック ○杉浦保夫  
西尾市民病院整形外科 花木和春  
沖縄中部病院整形外科 永峯功一

Paraplegia の出現当初の青年例では術後経過良好であったが、Paraplegia 高度となった熟年例では術後経過は不良であり、症状が明確となった段階で早期に椎弓切除による除圧を図ることが肝要と思われる。

18. 歩行障害をきたした achondroplasia 例の検討

三重大学整形外科

○森本 亮・笠井裕 ・竹上謙次  
内田淳正

症例は 48 歳、女性、32 歳時より左下垂足がみられたが、放置していた。48 歳時に歩行不能となり、当院で第 1 腰椎から第 2 仙椎までの除圧固定術が行われ、わずかに歩行能力の改善が見られた。本例を供覧し、性格テストの結果や文献的考察を加えて報告する。

症例検討

座長：二井英二

19. 多発性骨端異形成症と思われる 1 例

高山赤十字病院整形外科

○荒谷 繁・益田和明・前田雅人  
高澤 真・有本利恵子・清水孝志  
溝口隆司

症例は、3 歳 4 か月の女兒。O 脚と内旋位歩行を主訴に来院した。身長 87.7 cm、体重 12.5 kg、生育歴に特記することはない。理学所見では内反膝の他は特に異常を認めず、顔貌も特徴的所見はない。X 線上、大腿骨近位および遠位骨端核の形成不全、脊椎の凸レンズ様変形、手根骨の骨化遅延を認める。脊椎骨端異形成症、pseudoachondroplasia との鑑別についてご検討お願いします。

特別講演 I.

座長：山崎征治

日本整形外科学会研修会  
(認定 1 単位 認定番号 01 1048 01)

「骨系統疾患の遺伝子解析

ーベットサイドからベンチサイドへー」

理化学研究所・遺伝子多型研究センター  
変形性関節症関連遺伝子研究チーム  
チームリーダー

池川志郎先生

特別講演 II.

座長：内田淳正

日本整形外科学会研修会  
(認定 1 単位 認定番号 01 1048 02)

「手の先天異常の治療」

山形大学医学部整形外科学教室教授

荻野利彦先生